

本論文は、院政期から江戸時代初期にかけての歌学書、注釈書、名所歌集などについて、享受史的視点からひとつの考察を試みようとしたものである。たとえば和歌史や諸本論を、あるいは中世の人びとの校勘という行為を、享受という視点から読み解くことで、文学作品は、思いもかけない一面を披瀝しはじめる。文学史をより鮮明なものとするためにも、享受史的視点は有効であると思うのである。取りあげた作品は、源俊頼『俊頼髓脳』、勝命『真名序注』、『内裏名所百首』、宗祇『浅茅』、戸田茂睡『梨本集』、『類字名所和歌集抜書』などである。本論文の構成は、以下の通りである。

序論

一 歌学編

- 『俊頼髓脳』享受史試論—俊頼から顕昭・定家へ—
- 享受と諸本—『俊頼髓脳』諸本考—
- 久世本『俊頼髓脳』成立考
- 古今集—享受史—院政期から鎌倉期—
- 院政期の古今集序注と日本書紀注釈書—勝命『真名序注』を中心に—
- 制詞の享受史・覚え書き

二 名所・歌枕編

- 疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』考
- 伊達文庫蔵『名所三百首注』研究
- 曼殊院蔵『内裏名所百首』の性格
- 『内裏名所百首』の享受と歌枕の固定化
- 宗祇の読書—岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』をめぐって—
- 『類字名所和歌集抜書』諸本論
- 抜書の意味—『類字名所和歌集抜書』の場合—

三 歌枕資料編

- 疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』翻刻
- 伊達文庫蔵『名所三百首注』翻刻
- 『宗砌名所和歌』・『宗祇名所和歌』

結論

序論

印刷文化が普及して、テキストがほぼ標準化した現代とは違って、読み手がどのようなテキストに基づいたかは、かつて大きな問題であった。基づいたテキストによって、作品の受け取り方にかなりの差異が生じたからである。当時の人々が、どのようなテキストを用いたかということを中心に据えて、歌学書や名所歌集などの享受の間

題を考えてみたい。

一 歌学編

『俊頼髓脳』の諸本57点の本文の異同について、享受史的視点から解釈を試みた。また、顕昭本『俊頼髓脳』の重要性を指摘するとともに、その書写年代も推測した。古今集注釈書についても同様の視点により網羅的に概説、また勝命『真名序注』については、書物に対する享受の仕方の、時代によるずれを考えてみた。茂睡の批判した制詞については、その出自を明らかにしようとした。

○『俊頼髓脳』享受史試論—俊頼から顕昭・定家へ—

『俊頼髓脳』の顕昭本と定家本との本文の異同から、顕昭が俊頼説を忠実に継承しようとしたのに対して、定家は自説を用いて俊頼説を改変しようとしたとみられた。俊頼から顕昭へと継承された新しい表現を求める動きは、定家によって斥けられたのだ。つまり、和歌史の流れが、定家によって大きく変えられたのである。これは、俊頼から定家へという和歌史を『俊頼髓脳』の享受を軸として考察してみようとする試みでもあり、従来軽視されてきた顕昭本『俊頼髓脳』の重要性を指摘するものでもあった。

○享受と諸本—『俊頼髓脳』諸本考—

管見のおよんだ『俊頼髓脳』の諸本57点を分類しなおした。顕昭は顕昭本に近い『俊頼髓脳』と、『唯独自見抄』に近い『俊頼髓脳』との、少なくとも2種類の『俊頼髓脳』を用いたと推定された。顕昭の抱いた俊頼像には、幾らかの巾の広さがあったようだ。また、真観が用いたのは『俊頼口伝』という伝本で、その内容は彼の歌道上の立場に照応している。享受史の一形態として、諸本論や系統論を想定してみる必要があるだろう。

○久世本『俊頼髓脳』成立考

京都大学附属図書館所蔵の顕昭本『俊頼髓脳』（久世本）の成立年代についての考察。同図書館には、久世家旧蔵書が他にも所蔵されている。それらとの比較から、久世本の奥書筆者が久世通熙（みちさと）であり、書写年代は江戸後期であることが推測された。久世本が顕昭本で最古に属する写本という従来の見方は、変更の必要がある。

○古今集—享受史—院政期から鎌倉期—

院政期から鎌倉期にかけての古今集の享受史と、和歌の家の展開を概論的に述べた。

院政期の古今集注釈書などに及ぼした日本書紀注釈の影響の大きさや、六条家歌学の御子左家歌学に及ぼした影響、鎌倉後期の反御子左派など異端の活動についても指摘した。

○院政期の古今集序注と日本書紀注釈書—勝命『真名序注』を中心に—

現存最古の古今集注釈書とされる勝命『真名序注』や江家本『仮名序注』に、『日本紀竟宴和歌』・信西『日本紀抄』・『日本紀私記』などの影響が大きいことを述べ

た。古今集注釈書と日本書紀注釈書との関係は、すでに院政期から密接であったのである。また、院政期における「日本紀」「古語拾遺」という概念が、現在のそれとは異なる広義のものであったことも指摘した。

○制詞の享受史・覚え書き

室町末期の制詞が『詠歌一体』を中心として理解されていたのに対して、江戸初期から制詞が集成され、制詞の範囲が拡大される傾向にあったことを指摘した。戸田茂睡『梨本集』によって排撃されたのは、室町末期の制詞ではなく、江戸時代に入って拡大された制詞の世界であることを指摘し、制詞の享受にも史的変遷が見られることを述べた。

二 名所・歌枕編

『内裏名所百首』の伝本は管見でも53点を数えるが、特筆すべきはそのうちの32点が抄出本やその注釈書であることだ。抄出本は初心者に喜ばれ、室町時代を中心に多く著された。抄出本2点を紹介し、また、当時の歌枕の変化と、『内裏名所百首』の享受との関係についても考えてみた。一方、歌数1200首の曼殊院蔵本については、慈運の校勘を、彼の読書行為と考えた。『浅茅』についても、宗祇の読書を推測してみた。『類字名所和歌集抜書』については、親本の昌?『類字名所和歌集』と比較した。

○疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』考

『内裏名所百首』の歌数1200首の伝本や300首の抄出本、注釈書など、管見のおよんだ計53点を分類した。疎竹文庫旧蔵本は歌数300首の注釈書。作者については、連歌に近い公家以外の身分の人物と推測される。また、注釈には抄物由来のことばが散見し、根拠を明示しない中世風な解釈も見える。流布本などとの影響関係もうかがえるが、その相互関係はなかなか難しいようである。

○伊達文庫蔵『名所三百首注』研究

これも『内裏名所百首』の歌数300首の注釈書。作者は未詳ながら、中世語が多く用いられ、説話を多用し、本歌を多く掲げ、漢詩・漢文を少なからず引用する、などの特色があり、必ずしも啓蒙的な注釈書とばかりも言い切れない。ただし、歌の意味や情緒を分かりやすく解説するという一面もあるようだ。

○曼殊院蔵『内裏名所百首』の性格

歌数1200首の『内裏名所百首』の諸本22点を調査、分類した。曼殊院蔵本は、慈運が永正元(1504)年に書写したもので、現存する伝本のうち最古のものに属する。注目されるのは、慈運の校勘の跡が数多くみられることである。なかでも見せ消ちは単なる誤写の訂正ばかりではなく、本文選択の跡かと思われる。つまり、これらの校勘は、慈運の読書行為であったと考えられ、室町末期の読書・享受の実態を示す好例であるといえよう。

○『内裏名所百首』の享受と歌枕の固定化

南北朝時代から江戸時代初期にかけて、歌や連歌に用いられる名所の数が総体的に減少するなかで、『内裏名所百首』に一致する名所の数はあまり減少することがなく、割合としてはむしろ上昇する傾向にあったことを指摘した。『内裏名所百首』の抄出本は、初心者やその周辺の人びとに、歌枕の教科書として迎えられたようだが、そうした簡便なテキストとその享受者層とが、歌枕の固定化へと向かう時代の流れを支えていたと考えられる。

○宗祇の読書—岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』をめぐって—

宗祇の『浅茅』について、その後半部が西尾市岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』によく似た名所歌集に基づいていることを証明した。書物に対する志向も時代とともに変化する。現代ではあまり顧みられない岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』だが、それに近似する書物が、宗祇に読まれていたのである。宗祇の作品のなかに現れる名所や彼の歌枕観について考える際、岩瀬文庫蔵『名所和歌抄出』は不可欠の資料であるといつてよい。

○『類字名所和歌集抜書』諸本論

『類字名所和歌集抜書』は、里村昌?『類字名所和歌集』を抄出したもので、伝本は23点を数える。『類字名所和歌集』から、名所数が約2分の1に、歌数は約3分の1に削減されている。江戸時代初期の読者層の拡がりや、それにとまなう享受者層のレベルの低下に応じて求められ、求めを受けて刊行されたものと考えられる。

○抜書の意味—『類字名所和歌集抜書』の場合—

『類字名所和歌集抜書』と昌琢『類字名所和歌集』とについて、収められた歌枕のイメージや歌枕観を比較してみた。『類字名所和歌集抜書』は歌枕の数や歌数こそ少ないが、歌枕の中心的なイメージについては、『類字名所和歌集』のそれを忠実に継承しようとしたと思われ、『類字名所和歌集』のいわばダイジェスト版をめざしたと考えられた。そこに当時の「抜書」＝抄出本のひとつのありようがうかがえる。

三 歌枕資料編

「二 名所・歌枕編」で解説を施した、2点の資料の翻刻を載せる。またその他に、2点の小さな名所歌集の翻刻も載せる。これら4点は、先に述べたことがらを傍証するものであり、同時に斯界の研究に資するものと考えられるからである。

○疎竹文庫旧蔵『名所三百首注』翻刻

疎竹文庫旧蔵の『内裏名所百首』で、歌数300首の注釈書の翻刻である。

○伊達文庫蔵『名所三百首注』翻刻

伊達文庫所蔵の『内裏名所百首』で、歌数300首の注釈書の翻刻である。

○『宗砌名所和歌』・『宗祇名所和歌』

これらの2点は、一首の歌のなかに多くの名所を列挙して、歌枕を覚えやすくした名所歌集である。いずれも『内裏名所百首』の抄出本に付載されている。

結論

以上、歌学書や名所歌集を対象として、享受史的視点からの考察の可能性を模索した。『俊頼髓脳』では、本文の異同という書誌的問題にそうした視点を導入することで、和歌史がかなりリアルに読み解けた。また、享受史の一形態として、諸本論、系統論を想定する必要性も指摘した。その他の作品においては、抄出本、あるいは中世人の校勘という行為などの問題を考える際に、享受という視点がきわめて有効であることを示し得たように思う。書物を、諸本を、いかに著述されたか、ではなく、いかに享受されたか、という視点から捉えてみる必要があるということ、あらためて強調しておきたい。享受史的視点は、文学作品や文学史の研究にたいへん有用だと考えられるのであり、それは、今後、文学研究に積極的に援用されるべきではないかと思うのである。